

[時事ドットコムニュース](#) > [特集](#) > [新生Vリーグ3季目の試練 嶋岡会長に聞く](#)

新生Vリーグ3季目の試練 嶋岡会長に聞く



安全、発信、そして五輪

プロ野球やJリーグに続き、各競技の国内試合再開に向けた模索と準備が本格化している。バレーボールのVリーグは、7月1日に2020-21シーズンの日程などを発表した。「コロナ危機」で、厳しい試練が待ち受ける新生Vリーグ3季目。延期された東京五輪もにらみ、日本バレーボール協会会長でもある嶋岡健治Vリーグ会長に、見通しと課題を聞いた。(時事通信社・若林哲治)

1部リーグのV1は男女とも10月17日に開幕し、収容人員の最大50%の観客を迎えることを想定して準備を進めるといふ。

―開催へ向けて最大の課題は。

嶋岡会長「第一はファンの安全、選手、運営スタッフの安全。もちろん選手も検査をしながらになる。こういう中でできる限りの努力をして、スポーツで元気になるてもらえればありがたい」

―最大50%としたのは。

「国の施策にも合わせないといけないが、現時点ではぎりぎり50%ぐらいかなと。数字を明確にして準備を進めようと考えている。インドア競技だから『密』のリスクが相当あるので、ソーシャルディスタンスを非常に気にしながらやっていく」

―Vリーグは応援団も一定の人数が必要になる。

「50%をどう使うか。2年前からホームアンドアウェーを明確にして、ホームを少し厚くする仕組みなので、チームとよく相談する。ただ、一般の方に見てもらえる機会を多くつくらないといけない。アウェーの応援団は移動のリスクも厳しいので、これからルールを明確にしていかないと」

―入場券の売り方にも関係してくる。

「前売りで(混雑具合を)把握する方法もある。ただ、前売りで全部売って、当日来たら当日売りがなかったのでは不都合なので、全くないのは厳しいかなと」

―各チームの考え方や姿勢は。

「こういう状況は相当認識してもらっていて、みんなで対策してやっていかないといけない。ただ、バラバラではいけないので、ある程度基準をつくって守ってもらう」

―プロ野球は6連戦を組んで移動を減らす工夫もした。

「プロ野球やJリーグは自前のスタジアムを持っているので、ある程度自分たちの事情で日程も組めると思うが、われわれはコロナ前から会場を押さえに入っていた。(近年は)会場を取るののがものすごく大変で、やっと取れたから、会場ありきでやらざるを得な



「できる限りの努力をして、スポーツで元気になるてもらえれば」と語る嶋岡会長=2020年6月25日、東京都中央区の日本バレーボールリーグ機構【時事通信社】



前季女子プレーオフ決勝、岡山から得点を挙げて喜ぶJTの林琴奈（左）ら。マスク姿の観客はまだ少なかった=2020年1月26日、東京・国立代々木競技場【時事通信社】

い事情がある」

—Vリーグはほとんど公共施設。自治体も、住民にスポーツを楽しんでほしいとは思うが。

「こういう状況だから駄目というところはほとんどない。ただ、感染が出る不安とのバランスで、相当難しい判断をされるだろう。今のところはVリーグが来るのはありがたいと言ってくれるので、われわれやホームチームが、リモートマッチ（無観客）になるケースも含め、丁寧に説明して進めたい」

—動画配信などの活用は。

「V1は主にD A Z Nで放送し、できない試合は独自のV. T Vで見えていただいている。半分しか入れないところをどう見せるかの工夫も非常に大切な

ので、頑張らないといけない」

企業を左右する五輪の成否【次ページ】

[1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [次へ](#) [フォトギャラリー](#)

企業を左右する五輪の成否

—「新生Vリーグ」に衣替えして3季目。コロナ前は、どんな展望で3季目に臨もうと考えていたか。

「新生Vリーグを旗揚げした一番のポイントは、ずっと会場にそこそこ足を運んでいたが、少しずつ入場者数が落ちてきていた。いろんな原因があったと思うが、長らく企業中心で、会社の応援が多いとか、日本代表が強いとそれに見合っただけで入っていたものの、JリーグやBリーグと比べて一般のお客さんを呼ぶ点で遅れていた。そこで各チームがホームの試合に、地元の一般のファンを呼び込もうと新生Vリーグをスタートさせたが、1年目は慣れていないこともあり、相当厳しい数字で終わった。その反省のもとに前季はだいぶ回復して、方向的には間違いないだろう」

17-18シーズンから衣替え後の18-19、19-20シーズンの1試合平均入場者数は、V1男子が2731人、2046人、2741人、同女子は2363人、2136人、2301人と推移している。

「そのうえでの3季目として、地元喜んでもらうイベントをいろいろ打ち、ゲームの充実も図りつつ楽しんでもらおうと、会場における演出、飲食、会場周りなどの施策をつくらうとしていたところにコロナが出てきた。観客50%となると、考えていたのと同じようなしつらえでどこまでできるか。各チームと議論している。V、TVで見てもらう機会も増やし、会場には来られないけれどもバレーをしっかりと見てもらうように」

—今までは、むしろ満員だと飲食も混んでいてゆっくりできなかった面がある。

「よく言われる『新しい仕組み』を考えるチャンスにしないといけない。それで、満員になった時もうまく使える形を考えていければ」

—動画で見てもらっても、それをどう収入化するか。

「これはなかなか…。あまり見たことのない方をどう呼び込むか。バレーとはこういうものですよと、SNSなどを含めてどう伝えるか。チームから地元の人たちに伝えてもらうのも、HPなどを通じて見てもらうのも含め、環境づくりがポイントだと思う」

—各チームの運営はもちろん、コロナ不況の影響はスポンサーにも。



「方向は間違っていないだろう」と語る嶋岡会長
= 2020年6月25日、東京都中央区の日本バレーボールリーグ機構【時事通信社】



2019-20シーズンの男子V1開幕記者会見に臨んだ選手たち=2019年10月16日、東京都港区【時事通信社】

「相当厳しいでしょう。いろんな話が出ているのは事実。引き続き頑張ってくれと言ってくれるところもあれば、こういう時期だから…というところも。ただ今のところ、試合数が減ってしまう状況ではないので、会場の（広告の）設営などは従来通りできるから、今まで通り見てもらえる部分を確保したうえで何をするか」

—バブル崩壊当時などに比べてスポーツの位置付けや価値が変わってはいる。

「そうは言いながら企業は精査する。自社の事業目的にそのスポーツが合っているか、スポンサーすることで価値が確保できるか。相手がどう思っていて、どうすればスポンサーになってもらえるかをわれわれが考えなければ」

—スポンサーの動向には、東京五輪ができるかどうかはかなり大きく影響しそうか。

「そうですね。そこはもう…ちゃんと開催してもらえるとって準備を進めるしかない」

[【前ページ】安全、発信、そして五輪](#)

[五輪延期と代表の「時間」](#) [【次ページ】](#)

[前へ](#) [1](#) [2](#) [3](#) [4](#) [次へ](#) [フォトギャラリー](#)

五輪延期と代表の「時間」

V1は18-19シーズンが秋から4月半ばまでの長丁場だった。19-20シーズンは五輪に備えて短縮し、男子は2月末、女子は1月末までの予定を組んだ。今季はファイナルをシンプルにするなどして男子が4月4日まで、女子はさらに早く2月21日までに終えて代表の強化期間をつくる。

—五輪の延期で、今度も五輪年になったことで、代表強化との兼ね合いをどう考えたか。

「今季の設計をした段階では、従来の形に戻す形で3月、4月まで組んでいた。そこへ五輪が入ってくるので、代表をどう強化するかとなり、Vリーグが代表を応援する形で組み立て直した。女子は一定のところまで代表選手にVリーグを頑張ってもらい、あとの期間には（代表以外の）若手による『V1カップ』を計画している。男子の代表は予定を見せて、最後までやっても大丈夫だということで、ほぼ当初の予定通りやって、その後で代表合宿になると思う」

—男子と女子でバレーの質や事情が違うからだと思うが、日本協会会長の立場で、コロナによる五輪代表選考への影響はどう見るか。

「いろんな見方があると思う。プラスの面では、もう1年強化ができて、代表に入れられるか、入れられないかを見る時間が取れた。一方で、どのくらい影響があるか分からないが、2020年に向かってこれが最後だから頑張ろうとやってきた選手が、1年延びて体力的、モチベーション的に継続する難しさがあるかもしれない」

—国際試合ができなかった。五輪の参加チームも対戦順も決まっているので、本来は国際試合でシミュレーションしたいところだった。

「それが今年が一番のデメリット。特に五輪の前に代表選考も兼ねていたネーションズリーグがなくなり、やってきたことが良かったのか悪かったのか、練習の成果を見る機会がな



東京五輪で活躍が期待されるジェイテクトの西田有志。前季ファイナル準決勝のサントリー戦で=2020年2月24日、広島・エフピコアリーナふくやま【時事通信社】



五輪年だったため2月に始まっていた今年の日本女子代表合宿。トスを上げる佐藤美弥（日立）と見守る中田久美監督＝2020年2月14日、東京都北区の味の素ナショナルトレーニングセンター【時事通信社】

いので、どう続けてやっていくのかが強化の一番の難しさだと思う」

—Vリーグで実戦の勘を取り戻し、代表で顔を合わせてコンビもつくらないといけない。

「技術的、体力的なものは各チームで回復できる。あとは代表として集めた時にコンビをどうつくるかだが、全く初めての選手が集まるわけじゃないので多少時間をかければ元には戻るだろう。ただ日本のようにあまり体が大きくないと、練習時間でカバーするしかない。大きい相手に対して、精密なコンビを時間かけてつくっていかざるを得ない。身体的なハンディはそこにあるかと思う」

—国際試合再開のめどは。

「今のところ、全く1年ずれた形で来年5月ぐらいから、ネーションズリーグが開催される予定。ただ国際試合は、その時にコロナがどうなっているか。呼べない、行けない…今の状況では『?』ではある」

[【前ページ】 企業を左右する五輪の成否](#)

[急がれる「本拠地」確立【次ページ】](#)

急がれる「本拠地」確立

—嶋岡会長の現役時代から、日本のバレー界は人気が実力をつくるという考えで、観客を集める努力も日本のスポーツ界では先頭に立ってやってきた。

「昔とだいぶ違うのは、他の競技がいろいろ出てきて、そこでの比較もあると思う。やはり今のスポーツは、その地域の人に身近な選手を応援する気持ちを持ってもらうことが非常に力になるんじゃないか。その人たちに向けて出ていかないと。商店街で選手が何か買い物をした時に頑張っねと言われるとか、こういう話が選手もうれしいし、そういう人たちに来てもらうことでやりがいもある」

—日本代表の試合にはたくさん入って、国内リーグには入らない時代もあった。

「やっと去年のワールドカップで西田有志が活躍して、ジェイテクトの人気が出てきた。企業だけでなく地域の人たちと一緒に元気になっていくと全体が盛り上がる。だから選手は外へ出ていかないといけないと思う。地域が、おらが街の選手を応援しようという形が早くつくれないと。そのための一番の課題は、会場が取れるか取れないか。思うような日程がなかなか取れない」

—公共施設は制約も多い。

「Bリーグも公共施設だが、提携を結んで優先的に使わせてもらっている。その代わりに自治体に対してどんな恩返しができるかということを考えている。自治体のイベントにチームが出ていって一緒にやるとか、どんどん出ていかないといけないのかなと」

—他の競技を見ても、代表クラスで観客を呼べる選手はもちろんいるが、そこまでいなくても地元で人気者になる選手はいる。

「自分はプロで、来てもらってなんぼだからとアピールして来てもらう。それが最後は全部自分に跳ね返る。そうならないといけないと思う。これは企業チームの選手も同じ。子どもたちが見て、あの選手格好いいね、あの選手みたいになりたいね、バレーを選ぼうかな、



「地元の人たちの応援は力になりますよ」と語る嶋岡会長＝2020年6月25日、東京都中央区の日本バレーボールリーグ機構【時事通信社】

となる選手になってほしい。サインしてあげる、握手してあげる、それでその子が何年か後に選手になってくれればこんなにいいことはない」



無観客になった前季男子ファイナル決勝。観客席に大きな横断幕が張られた
= 2020年2月29日、群馬・高崎アリーナ【時事通信社】

—コロナで会場へ行けない人たちに見てもらうには、プレーそのものの質や迫力が一段と問われる。

「この間、コロナで思う存分練習できなかったが、やっと動き出した。これから準備して何とか間に合うのかなと思う」

—例えば西田選手のスパイクやサーブなどは、そばで見ればもちろんだが、あの迫力は動画でも出しようがある。

「すごいんだというのを分かってもらえば、また違う見方をしてもらえると幸いですよ」

◇嶋岡 健治（しまおか・けんじ） 1949年5月9日生。東京都出身。72年ミュンヘン五輪金メダリスト。中央大、日本鋼管（現JFEホールディングス）でアタッカー、セッターとして活躍、「プリンス嶋岡」と呼ばれた。引退後は監督、同社新潟支社長などを歴任。2015年日本バレーボールリーグ機構代表理事会長、17年日本バレーボール協会代表理事会長。

（2020年7月2日）

[【前ページ】五輪延期と代表の「時間」](#)

[安全、発信、そして五輪【戻る】](#)

[前へ](#)
[1](#)
[2](#)
[3](#)
[4](#)
[戻る](#)
[フォトギャラリー](#)